

見性と坐禅

柳 幹康



今回は見性と坐禅に関する白隠の言葉を紹介いたします。

見性とは自性（己の本性）の本来の有り様をしかと見て取ることであり（『隻手音声（薮柑子）』）、自性とはひとりひとりに円かに具わる仏の心だと言います（『寒山詩闡提記聞』巻三）。白隠によれば釈尊の言葉を収めた五千余巻にも及ぶ膨大な經典は、つまるところ人々を見性に導くためのものであり、三世（過去・現在・未來）の仏祖・賢聖のなかで見性を得ぬ者は一人たりとも存在しません（『遠羅天釜 続集』）。白隠はその著書において、「仏道を成就したいと思うのであれば、まずは見性せよ」という禅宗初祖の達磨大師に帰せられる言葉をしばしば引き、その重要性を強調しています。

白隠によれば、読経や念仏・持戒などあらゆる実践はみな等しく見性に至る道ですが、なかでも効果的なのが禅の公案（課題）です。なぜ

なら公案に参じることでは人は容易に疑団（疑い）を起こすことができ、それが見性へ向かう力となるからです（『遠羅天釜 続集』）。

この疑い（大疑情）に大信根と大憤志を加えたものを三要（参禅に必要な三つの要素）といいます。これは高峰原妙という中国の禅僧の説で、白隠はそれを承け次のように述べています。

「古人も言っている、「参禅には三要を具えねばならぬ。一には大信根、二には大疑情、三には大憤志。そのうちの一つでも欠けば、足の折れた鼎かなえのようなものである」と（『八重葎やえむら』、『壁生草まできさ』等）。鼎とは三つの足がある器のことで、す。三つの足がそろって始めて鼎が立つように、大信根・大疑情・大憤志の三つがそろって始めて真の参禅が成立するというわけです。なお白隠の言葉によれば、大信根とは見て取るべき自性（仏心）の存在と公案参究の重要性に対する確信であり（『息耕録そっこうろく開筵普説かいえんふせつ』、『於仁安佐おにあんさ

美』卷上）、大憤志は見性という目的完遂まで怯ひるまず進み続ける決意です（『遠羅天釜』卷上）。

禅に参じる者は見性しなければなりません。

白隠は言います、「禅者と称する以上、まずは見性して悟らねばならない」、「見性して生死（という迷いの）家から出ることを、禅門の家と言ふのだ」（『壁生草』上）。

参禅から見性へのプロセスについて白隠は以下のように述べています。

ひとつの公案に対してただただ参究していけば、（あれこれ余計なことを考える）心は消え、がらりと開けて何もなく、あたかも何ら抛るべき所がない切り立った崖にいるような状態になる。もはや絶体絶命というところで胸がカッカとし、ハタと公案とひとつになつて、心身ともに消え失せる。これを「切り立った崖がけから手を放す時」と

いう。そこからハッと息を吹き返してみれば、自ら体験したものにしか分らない大いなる喜びを得るだろう。これを往生と名づけ、見性と言うのである。

〔遠羅天釜〕巻下)

実践上の心得について白隠は次のように述べています。「参禅はただ一気に進むことが肝要である。もし二日に一度発熱する瘡おこりのような塩あん梅ばいでするのであれば、永遠に見性することはできない」〔荊叢毒藥けいそうどくざい〕巻六)。ましてや余事にかまけて参禅を疎かにしてはなりません。白隠は言います。

雑務でのごたごたしていて参禅する暇いとががなく、世事が多く工夫を続けることが難しいなどと言ってはならない。真の禅者の前には雑務や世事などありはしないのだ。たと

えば大勢の人が行き交う街中で二三枚の小判を落とした際に、人が多く騒がしいからと言って捨て置くだろうか。きつと必死になつて人混みを掻かき分け探し求めずにはおられまい。もしも雑務や世事にかまけて参禅工夫を怠るのであれば、この上なく素晴らしい諸仏の道を二三枚の小判ほどにも思っていないということではないか。

〔遠羅天釜〕巻上)

本当に重要なことが何かを見定め、それに邁進するよう白隠は呼びかけているのです。

柳 幹康(やなぎ みきやす)

一九八一年栃木県生まれ。二〇二三年東京大学大学院博士課程修了、博士(文学)。東京大学東洋文化研究所准教授・花園大学国際禅学研究所客員研究員(副所長)。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による中国仏教の再編』(法藏館)。

お知らせ

今月号から花園俳壇の選者を務めていただきます、柳生正名先生を紹介いたします。

やぎゅうまさな

柳生正名 1959年生まれ。東京大学法学部卒業。金子兜太に師事。2001～02年、妙心寺にて則竹秀南老師指導の禅道会に参加。05年現代俳句評論賞。現在、武田伸一が発行人の「海原」創刊同人、「棒」同人。句集『風媒』。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

*ㄆ切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。お待ちしております。

送り先

〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町64
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園 係

*住所、氏名を必ずお書きください。

*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

*なお投稿はお返しいたしません。

花園
hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

- 【花園】第71巻 第7号(通巻第839号)
令和3年7月1日発行(毎月1日発行)
定価55円
【発行人】野口善敬
【編集人】石田信行
【印刷人】喜田眞司
【発行所】京都市右京区花園妙心寺町64
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400
電話／075-463-3121

表紙の絵「百日紅(さるすべり)」



ぐんぐんぐんぐん…
天に向かって。

絵・正親 里紗(おおぎりさ)

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,560円(税・送料込)です。

下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。